

# 一八五七年の反亂におけるラクナウ政權の構造

長崎暢子

## 一 はじめに

インドにおける一八五七年の反亂に関する研究の中で、權力問題をとりあげているものは少ない。中でも、本稿でとりあげているラクナウ市を中心としたアワド地域においては、農村部分が反亂に同調したことが他地域と比べて目立つた特色となつていたために、その研究も農民層の反亂への参加という視點からなされることが多かつた。この場合、とりあげ方は、だいたい二つに分れ、タールクダールのような大土地保有者の層も含めて、農村のあらゆる階層がイギリスにたいして反亂した、という點を評價する見方と、反亂の中でイギリス（外國帝國主義）ばかりでなく、固有の地主制にたいする農民戦争となつていったとしてこれを重視する見方とがある。<sup>(1)</sup> こうした方向の研究自體も、論證もまだまだ不充分であつて、もつとおし進められなくてはならないことはいうまでもない。しかしながら、本稿はこれまで觸れられることの少なかつた權力問題をとりあげ、とくに、一八五七年七月にラクナウ市に成立した反亂政

權の構造を明らかにしようとするものである。なお本稿は、一八五七年の反亂において、デリー、ラクナウ、ロヒルカンド、ジャーンシー、シャーハーバードなど各地に成立した政權を考察、比較してゆく試みの一部分であることを附記しておきたい。

ラクナウ市は一八五六年まではアワド王國と呼ばれた地域の首府であつた。アワドはもともとはムガル帝國の古い州(Suba)の一つで、アワドの太守は一七六一年以來はムガル帝國のワジール (wazir 樞密顧問官、國務大臣などの意味)の稱號を世襲する有數の實力者であつた。またアワドは一方では東インド會社にたいしても、一八〇一年の條約以來最も忠實な同盟者の一部をなしていた。従つてイギリスはネパール戰爭の際にアワドがイギリスを援助した功により、その地位を州から王國(Kingdom)へと、すなわち太守を王へと引上げた程であつた。

けれども、アワド王國の地位は決して安泰ではなかつた。東インド會社との條約によつて會社軍を領域内に駐留させるための巨額な費用を負擔せざるを得なかつたために、國內の地税は高騰した。また、いまや會社の傀儡でしかありえなくなつた王の下で、政治の紊亂がひきおこされた。そして、一八五六年二月十三日、總督ダルフージは失政を理由にしてアワド王國の併合を強行したのである。結局アワド王國の壽命は三十八年間しかなかつたわけであつた。アワド王、ワジード・アリー・シャー(wajid Ali Shah)は一〇〇萬ルピーの年金を貰つてカルカッタで餘生を送ることになつた。

このような強引なやり方はダルフージの惡名高い「失權の原則」にもとづくいくつかの土侯國の併合——土侯國の支配者には原則として養子のみとめず、彼に嗣子のいないときには東インド會社はその領土を沒收するといふもの——とともにインドの人々の怒を買つた。中でも、後に反亂シパーヒーの中心となつたベンガル連隊は當時一五萬人とい

われたが（その中約二萬三千人はヨーロッパ人）、その中の約 $\frac{1}{3}$ はアワド出身者であるといわれている程であるから、出身地アワド王國のこのような併合が彼ら、ひいてはベンガル連隊全體にひきおこした動搖は大きなものであったに違いない。

本稿では反亂の原因について詳述する暇はないが、牛脂、豚脂を塗つたといわれるエンフィールド銃の薬包の問題、シパーヒーの海外渡航問題、彼らの經濟的地位の低下の問題などに加えて、このアワド地域においては、反亂の一年前に行われた併合が人々の間にまきおこした波紋を考慮しておかねばならないであろう。

アワド王國の併合の際には、そのやり方の強引さのためにインドの人々の間に屈辱感やイギリスへの反感をまねいた。しかし、この他に生じた具體的變化には以下のようなものがあつた。

一 アワドの宮廷人、貴族たちの特權的地位の喪失。

二 これに伴つて、王族、貴族たちによつて保護されていた手工業者たちの生活手段の喪失。ムガル帝國の衰微によつて當時のラクナウは文化の一大中心地となつていた。人口は約七〇萬にもなり、そこには高度の手工業が榮えていたばかりでなく、詩や音楽などにおいても一流の人々が集つていたのである。彼らもその保護者を失つた。當時、併合によつて解體された軍の兵士とか、舊政府に仕えていた者で失職、飢餓状態にあつた者などをあわせると約二萬人ものぼつたといわれている。<sup>(3)</sup>

三 新しいセトルメントの導入。

併合直後に行われた第一次署名式セトルメントでは、タールクダールやザミーンダールのような大土地保有者を排除して直接の耕作者と國とが地税支拂いのとりきめをしようとする意圖がかなり濃厚にあつた。たしかに、この

時點でイギリスはタールクダール排除の方針を實際にどの程度貫いたのかは大いに疑問のあるところである。(4) ベーデン・ポウエルはこのときタールクダールとのとりきめの下に入つた村の數を一三、六四〇村、地税にして三五〇六、五一九ルピーとしており、それ以外のとりきめの下に入つた村の數を九、九〇三村、地税にして三二〇八、三一九ルピーとして(5)いる。これを一應の目安と考ふるなら、この段階ではタールクダールたちはその保有地の半ば以上を確保することに成功したといえよう。しかし、これはあくまで畧式セトルメントであつて、正式のセトルメントはタールクダールに不利な形でなされる可能性も、當時の狀態では充分にあつた。また、このような畧式セトルメントにおけるタールクダールへの妥協も、彼らの有形、無形の抵抗を考慮して行われたのである。従つてタールクダールはイギリスにたいして、當然不安や反感を抱いていたであらうと思われる。

以上述べてきたようなアワードにおける特殊な状況とインド全域にわたる反イギリスの胎動の交叉したところにラクナウの蜂起が発生する。ラクナウの蜂起は時期的にいえば決して早い方ではなく、他地域の先驅となるものではなかつたが、一度起つた後は、その規模や基盤の深さは非常なもので、反亂の権力構造に關しても新しい問題を次々に提出したのであつた。

## 一 蜂起

一八五七年の四月にはすでに、インドの各地で蜂起の前兆とでもいふべき動きが発生しているが、ラクナウでもいくつかの不穏な動きがみられていた。政務長官に土塊が投げつけられたことなどはその一例である。

イギリス側は、ラクナウ駐屯の不穏な第四八歩兵連隊を四月中にラクナウから移動させようと一時は計畫もしたが

これは實行されなかつた。他の連隊が信頼できるかどうかが全くわからなかつたからである。

五月三日には、同じくラクナウ駐屯の第七不正規歩兵連隊のシパーヒーにたいして、問題の薬包カイロウジを嚙んで装填することを強要するという事件がおこつた。シパーヒーはこれを勿論拒否した。その結果、政務長官ヘンリイ・ロレンスは彼らを武装解除してしまつた。しかしこれもこのままおさまり、蜂起を招來するには至らなかつた。

五月十日、メーラトが反亂した。これが一八五七年と五九年の大反亂の發端である。このニュースはすぐさまラクナウ市内へも入つてきた。それ以後は市内の動きも次第に活發になつていつた。

五月十八日、「高い權威のあるムスリムの正式署名と印のある」ペルシア語で書かれた紙片が街で見つかつた。こ  
こには、信仰篤いムスリムは立上つて外國人異教徒を殺せ、というラクナウ市民への呼びかけが記されていた。<sup>(7)</sup>

翌五月十九日、ヒンディー語で書かれた宣言文が騎兵隊の兵舎近くの小屋に張られていた。その内容は、すべての  
ヒンドゥーとムスリムは一致して異教徒（キリスト教徒のこと）を殺せ、というものであつた。<sup>(8)</sup>

五月二十日、蜂起してイギリス人を襲え、とペルシア語でムスリムに呼びかけた紙片が市内で見出された。<sup>(9)</sup>

五月二十七日、ラクナウ市から約一四マイル程離れた所にあるマリハーバードの村でムスリムの不満が爆發し、武装蜂起した。これにたいしてハッチンソン大尉が五月二十八日に出勤した。この時、僅か三ヶ月前には、村民たちは指一本上げることさえできなかつたのに、今や武装した村民たちが大尉たちの行軍を注視していた、と大尉は驚いて記している。<sup>(10)</sup>

五月二十九日、再びラクナウ市内には、ヒンディー語、ウルドゥー語、ペルシア語の宣言文が張られていた。こ  
こでも、ヒンドゥーとムスリムに、團結して全ヨーロッパ人を滅せ、という激しい訴えが記されてた。<sup>(11)</sup>

五月三十日には、もう、ラクナウ市内の街路という街路には殆んど、ヒンドゥーとムスリムへ蜂起を呼びかける宣言文が張られてあつた。<sup>(12)</sup>

こうした宣傳と扇動を背景に、ラクナウ市の第一次蜂起がはじまる。ラクナウ市の蜂起には實は二つの段階があつて、一旦ラクナウ市に發生した蜂起はイギリスによつて潰されてしまふ。いわゆるラクナウの反亂はそれからほぼ一月後にラクナウ市周邊からのシパーヒーの流入によつて成しとげられることになるのである。

ともかく、ラクナウ市の第一次蜂起は五月三十日の第七一步兵連隊の蜂起からはじまる。しかし彼らは部隊の約半分しか蜂起に参加しなかつた。これに第七騎兵連隊の一部(二中隊)が合流する。この他に蜂起したのは第四八歩兵連隊の約半分と第一三歩兵連隊が少數であつた。彼らによつて何軒かのイギリス人の館が焼かれ、二、三人のイギリス人將校が殺された。<sup>(13)</sup>

翌三十一日の午後になるとラクナウ市内での民衆の蜂起がつづいて起り始めた。多數の民衆が市内のムフティーガンジという所にムスリムの緑の旗を押し立てて集つてきた。一時は約六千人もの人々がこの旗のまわりに集つていたといわれている。<sup>(14)</sup> 彼らは近くでイギリス人を一人殺し、市警察署を襲つた。警官は彼らを弾壓、解散させた。このとき、一五人から二〇人が殺された。警官の方も、四、五人の死者を出した。

このときの蜂起では、先述したと通り、市の民衆蜂起だけでなく、シパーヒーの蜂起もイギリスによつてついに鎮壓されてしまつた。この後にはきびしい弾壓がつづいて、澤山の人々が逮捕された。このような逮捕者の名の中には、後にラクナウ反亂政權のナードとなつたシャラフッダウラ(Sharaf-ud-Daulah)もあつた。<sup>(15)</sup> もつとも、彼の場合は證據も不充分であつたので、逮捕といつても中途半端なものだつたらしい。一方弾壓を免れた人々はシータープルから、

すでに反亂軍が制壓していたデリーへと逃走していった。

この第一次蜂起は、相當廣範のものであつたので、イギリス側は、計畫的な蜂起として捜査したのだが證據をつかむことはできなかった。現在のところでも、まだこれがどのようにして計畫され、何故失敗したのかは残念ながらもく分つていない。一説によると、反亂すべきかどうかでシパーヒーの中には深刻な意見の對立があつたとのことである<sup>(16)</sup>。なるほど、既に述べたとうり、シパーヒーはこのときには部隊の一部分ずつしか反亂していないから、この推測は當つているかもしれない。メーラトなどと比べるとイギリス側の行動が機敏であつたことも否定できない要因であろう。いづれにしても、この失敗と彈壓の後、ラクナウの民衆は反亂の中心には暫く姿を見せなくなり、ラクナウ市の反亂はアワドの中でも最後に残されることになつた。

六月に入ると、六月三日のシータープルの蜂起を皮切りにして、ラクナウ市周邊のあちこちで蜂起が發生しはじめた。それも、シパーヒーの駐屯する中小都市におけるものばかりでなく、農村部がイギリス支配に不服従の意志を示しはじめるのがアワドの特徴である。

農村部の動き、とくにザミーンダールやタールクダールの行動については、いづれ稿を改めて論じてみたいのでここでは詳しく述べないが、ただ彼らの「反亂」の實際は決して一部に伝えられるように華々しいものではなかつたとだけは記しておきたい。たしかに六月十二日までは大多數のタールクダールは武裝して人を集め、砦を固めた。その内の何人かは一八五六年にイギリスによつて行われた畧式セトルメントで失つた保有地を實力でとりもどして<sup>(17)</sup>いた。しかしながらこのことは、彼らが反亂軍と合流して共同作戦をとり、イギリスと非妥協的に戦うことを必ずしも意味しなかつたのである。

無論、このような「反亂」であつたとしても、イギリスの制定する土地制度の解體とうかがりてイギリス支配の崩壊を意味することには變りないから、イギリスにとつて大きな脅威であつたことは當然である。

六月半ばには、アワド全域でイギリス支配の貫徹している地域は殆んどなくなつてしまつた。ラクナウ市だけが孤城のようにイギリス軍の手に残り、各周邊部からのヨーロッパ人避難民を受け入れていた。しかし、それも六月十五日には、シータープル、シャージャハーンプル、バラーチ、ファイザーバード、ベナーレス、ジョーンプルというような所から、反亂軍がラクナウ市へ進攻してくるといふ知らせが伝えられる有様であつた。

ラクナウ市の當時の最高責任者であつた政務長官ヘンリー・ロレンスは反亂軍がラクナウ市に進攻してくるのを待つよりは、積極的に彼らに先制攻撃を仕掛ける方が得策だと考えた。そこで、六月三十日、彼はラクナウ市の駐在官<sup>レジデント</sup>邸から約八マイル程ファイザーバードの方向へ行つた所にあるチンハットという村まで出撃したのである。しかし、結果はインド人砲兵の「裏切り」の故もあつて、イギリス側の完全な敗北であつた。一一八人のイギリス人、ならびに一七五人のインド人を陣營から失つたイギリス側は駐在官邸にたてこもらざるを得なくなつたのであつた。

このとき籠城した人數についてはいろいろいわれているけれども、ヒルトンは初めに籠城した人數は次のとうりであり、後に周邊地域から逃げてきた人々によつてさらに増加したらしいとしている。すなわち、當初籠城したのは市民(男)一三八人、イギリス人兵士一四四人、婦人、子供併せて五三二人で合計八〇四人であつて、この他にインド人約七百人がともにたてこもつたとしている。もともとラクナウ市のイギリス軍はヘンリー・ロレンス指揮する第三<sup>(18)</sup>二歩兵連隊——數にして約三百人強——しかいなかったたのであるから、これはそれほど見當違ひの數ではなからう。

一方これにたいするラクナウ市の反亂軍はどのような勢力であつたのか。これについても様々にいわれている。



もともとのラクナウ駐屯インド人部隊は歩兵連隊が三つと騎兵連隊が一つでそれほど多くはなかつたのだが、反亂軍の兵力はアワドで反亂した殆んど全部隊から成つていて膨大な數にふくれ上つた。すなわち、歩兵はまず第一から第九までのアワド不正規歩兵連隊（駐屯地はそれぞれ、サローン、セクローラ、ゴーンダー、ファイザーバード、ダリアーバード、ファイザーバード、スルターンプル、シータープル）、次にファイザーバードに駐屯していた第二歩兵連隊、さらにスルターンプルとシータープルに駐屯していた第一と第二の憲兵隊であつた。

次に騎兵隊はスルターンプルに駐屯していた第一五不正規騎兵連隊や三つのアワド地方連隊、ウエストン警察隊などの七、八百騎であり、砲兵隊はファイザーバードとセクローラに駐屯していた九ポンド砲砲兵部隊が二中隊（各々六門の大砲をもち、その他に三門から四門のこの地方製の口径の小さい大砲をもつていた、これは戰場では役立たずだつた）であつた。一連隊六百人という計算は、脱走者、歸郷者の多かつたことを考えるとかなり高い評價となるが、グビンズはこれを採用して歩兵が約五千五百人、騎兵が八百騎、砲兵一六〇人としている。彼はこの計算のときは一部を數に入れてなかつたから、歩兵はもう少し多く約六千三百人程度と數えてもよいかもしれない。<sup>(19)</sup>

以上のシパーヒーの他に、アワドでは火繩銃や刀まで使つて武装したザミンダール、タールクダールの郎黨の膨大な數があつたが、これは評價が非常に困難である。何故なら、既に述べたとおり、彼らはある時には反亂軍に合流するが、ある時には反亂軍と全く別行動をとり、時には反亂軍と對立したりさえしたからである。ただ、タールクダールの手勢が反亂軍に最も多く合流していたのは、ハヴロック將軍が一八五七年八月にラクナウ市に到着できずに二度目の退却を行つた直後、すなわちイギリス軍の旗色が一番悪かつたときのことであつたらしい。

こうしたタールクダールたちの曖昧な動向に加えて、ラクナウにはたえず東部のピハール、ベンガル方面から反亂

軍の流入があつたといわれているし、また一八五七年九月のデリー陥落後はそちらからもかなりの反亂軍が落ちてきたであろうから、ラクナウ反亂軍の勢力には相當の移動があつたと考えねばなるまい。多いときには二萬人から四萬人、あるいは二〇萬とする説さえもある。<sup>(21)</sup>

こうした人々を集めた軍の組織の仕方はイギリスのモデルにのつとつていたらしいがその内容はよく分つていない。<sup>(22)</sup>

こうした反亂軍に圍まれて、ラクナウ市のイギリス人の籠城は一八五七年九月二十五日、第一回の救援軍がハヴロック將軍の指揮でやつてくるまで續いた。その上、この救援軍も反亂軍の包圍を解いて籠城軍を救出することはできなかった。従つて本格的な救出は同年十一月十七日、キャンベルの指揮する部隊の到着を待たなくてはならなかつたのである。

### 三 ビルジース・カードル (Birjis Qadar) の即位

一八五七年六月三十日のチンハットの戦鬪の勝利を契機にして、この地域のイギリス支配は事實上崩れ去つて、それに代つて新たな反亂政權がラクナウ市に誕生した。このとき、一八五六年に廢位されてカルカッタに幽閉中の前アワド王、ワジード・アリー・シャーに代つて、彼と王妃ハズラト・マハル (Hazrat Mahal) との間に生れた息子、十一歳のビルジース・カードルが七月五日<sup>(23)</sup>に即位して、この政權の首長となつた。

このビルジース・カードルの即位をめぐつておこつた次の諸事實はこの反亂政權の性格と構造とを物語つている。以下、即位に關する諸史料をあげて検討してみよう。なお、大括弧は原史料の編者のつけたもので小括弧はわたくし

のつけたものである。

(i) マムー・ハーン (Mamnu Khan) にたいする政府の裁判における前市警察長官<sup>コトケイシ</sup>の陳述。

「問——Birjis Kudr の即位に關して、被告(マムー・ハーン)がどんな能力を發揮したか知つてゐるか。

答——前の王族に屬する若い人々の中には、王候補が二人いて各々自分の味方を持つていた。しかし、Rajah Jey Lall と Mamnu Khan の勢力が勝利を得て、この二人が反亂した人々と交渉した結果、Birjis Kudr が王位に即位したのである。」<sup>(24)</sup>

(ii) ジャエ・ラール (Jay Lal) にたいする政府の裁判の判決文の一部。

「誰が王として立つられるべきかについて、今や意見の食い違ひが生じた。騎兵隊は、Sooliman Kudr すなわち Mulka Ahud (Malika Ahad) の息子を望み、一方歩兵隊と被告(ジャエ・ラール)は、Birjis Kudr を望んだ。後者の理由は、前王の子孫が生きているなら、デリーの皇帝には服従しなくてはならないとしても、王位(Throne)はその人の生得權だということであつた。そして被告(ジャエ・ラール)の勢力が勝利を得たのである。」<sup>(25)</sup>

(iii) ジャエ・ラールにたいする政府の裁判におけるミール・ワジド・アリ・ダーロガ (Mir Wajid Ali Daroga) の供述。

「……私が Amjee-O-Dowla Wala の戸口を近づけようとしたとき、Mumnu Khan と Jeylal Singh が立つて語つて

いるのが見えた。私には Mummo Khan がうろ云っているのが聞こえた。Bridges [Birjis Qadar] は Wajid Ali Shah の息子だ。もしあなたが誰かを王位マクタルにつけようとして探しているのなら、Bridges Kudr [Birjis Qadar]の方がはるかにふさわしい、と。Rajah (ジャハ・ラール)は自分が將校たちのところへ行つて、明日の朝回答を持つて戻つて来よう、と答えていた。……そこで前王の妃たちが皆集つた。Rajah (ジャハ・ラール)は次のように述べた。軍隊の全將校は皆様に御挨拶を送るとともにこう申しております。われわれはお妃様方を助けに参つて居るのです。イギリスは王から國を奪ひ取り、王を幽閉し、ありとあらゆる面倒なことをひきおこしました。われわれは今、Bridges Kudr [Birjis Qadar]を王位 (throne) に即かせることを望んでおります。どうかこの措置に満足していただきたい、と。妃たちはこう答えた。私たちの主人はカルカッタに居るので、私たちに他にする術もありません。ただこれ以上面倒なことが王にふりかからないように何かするべきではないのか、と心配しております。……Rajah (ジャハ・ラール)は立上つて、妃たちの意見を「將校たち」に傳えに行く、といつた。翌日、彼は Bridges Kudr [Birjis Qadar]が王位に即くことに賛成であるといふ署名を妃たち全員がするやうにとメモを持つて来た。……Huzrut Muhul がそれに署名するやうにと頼むと、(二人の妃、Khoord Muhul と Soolan Muhul)は王が生きているかぎり署名はしない、といつた。Mummo Khan と Huzrut Muhul は怒つて立上り、出づつた。そこで妃たちは全員署名をこわつた。

……數千人が集つた。將校たちは Chandee Wala Bara Durce に座つた。……Mummo Khan と Bridges Kudr [Birjis Qadar]が宮殿からやつて来て座を占めた。……將校たちは立上つて傍で相談した。の中には Shahabuddeen Khan [Shahab-uddin Khan] 15 I. C., Burkat Ahmed 15I. C., Omorow Singh, Ragnath Singh, (Ragnunath

Singh) などがいた。Bridges Kudr を擁立する前に Huzrut Muhai に承知して貰いたい條件が三つか四つある、と彼らはいつた。

第一、デリーからの命令は遵守さるべきこと、受取られたならば、それは最後のな命令であること。

第二、ワジールは<sup>(26)</sup>軍隊によつて選ばれるべきこと。

第三、諸連隊の將校は軍隊の同意なくして任命されぬこと。

第四、イギリスに友好的である者のとりあつかいと處分の仕方に關しては決して口をさしはさまぬ<sup>(27)</sup>こと。」

(ハズラト・マハルは印こそ押さなかつたが、この條件を承認した。)

(iv) カマルツディーン・ハイダル・フサイニー (Kamal-ai-Din Haider Husain) の「アワド史」(Tanikh-i Awadh) より。

「……彼ら(將校たち)はこういつた。あなたにいくつか質問をしよう。もしそれに賛成なら、われわれはあなたをわれわれの統治者にしよう。第一は——われわれはデリーの皇帝に請願狀を提出するが、それに皇帝が同意すればあなたはわれわれの統治者となろう。あなたが王と呼ばれるかあるいはワジールと呼ばれるかはデリーの皇帝次第であつて、あなたは皇帝に忠誠を誓わねばならぬ。第二には——われわれの俸給は倍増さるべきである。兵士は以前のように六ルピーでなく、一二ルピー與えられるべきである。第三に——部隊の將校の任命はすべてわれわれの同意によらなければならぬ。第四に——ナイーブ<sup>(28)</sup>もともと代理、補佐、副などの意味、ここでは攝政の意味か)とディーワーン (Diwan, 稅務、財政を司る大臣) の任免はわれわれによつてなされる。會議<sup>カウンシル</sup>もしくは行政會議<sup>イサラト</sup>の命令

以外には何事もなされてはならぬ。第五には——イギリスから得られなかつた俸給の末拂い分は今すぐ與えられ<sup>(28)</sup>る。」

以上の諸史料から以下のことが分る。

(1) ビルジース・カードル擁立の中心人物は彼の母親の王妃ハズラト・マハル、および彼女の情人であつたといわれるマムー・ハーン、そしてジャエ・ラールの三人で、共に舊アワド宮廷に深い關係を持つていた。この三人、すなわち舊宮廷勢力が反亂將校たちとの交渉に成功してビルジース・カードルを即位させたのである。このとき、幼いビルジース・カードルが何の権力も持たないシンボルであることは衆知の事實であり、問題の即位に際しての諸條件も王妃ハズラト・マハルに承知して貰いたいものとして提示されたのであつた。

(2) 軍隊内にはスライマーン・カードル (Sulaiman Qadir) を推す騎兵隊とビルジース・カードルを推す歩兵隊との對立が微妙にあつた模様である。しかし、マムー・ハーンやジャエ・ラールの運動が功を奏してこの對立は決定的なものとならなかつた。<sup>(29)</sup>ビルジース・カードルでさえ、どうせ實權を持たぬ存在として擁立する以上、人物は誰でもそれほど問題にならなかつたのであろう。また、ここでも軍隊はアワドの舊支配者關係の者を頭に戴くことを當然と考え、何の抵抗もなかつた。この點は他地域で反亂したシパーヒーと同様である。

(3) 結局ビルジース・カードルが大守<sup>ナシク</sup>と呼ばれたか、それともムガル皇帝から相對的獨立を保つて王<sup>シヤイあるいはキング</sup>と呼ばれたかは不明である。<sup>(30)</sup>反亂の中では、デリーとラクナウが共同作戰をとるとか緊密に戰術上の連絡を保ちあうとかいうことはなかつた。しかし、ムガル皇帝への忠誠心はラクナウの、とくにシパーヒーの中には非常に強かつた。六月、ある

いは七月初めのこの段階では、これまで反亂の孤壘を守つてきたデリーの權威が反亂軍の中で最高度に達していたということもあろうが、ラクナウのシパーヒーの中にもムガル皇帝の命令を決定的とするほどの忠誠心があり、ムガルの體制の中に組みこまれようとする意識があつたということは注目しておかねばならないであらう。

(4) 即位に關してもつとも重要な點はシパーヒーが五條件を提出したということであらう。そして、さらに重要なはその條件の提出によつてシパーヒーが新しい政府内で人事權を掌握しようとしていることであらう。ワジュール、ディーワーン、ナীবをシパーヒーが自由に任免でき、さらに軍の將校は軍の同意なしには任命されえないのであるから、人事の實權は事實上シパーヒーの手にあつたと考えてよからう。そして、これらを行使する實體として、後述する行政會議という合議體が登場してきていることに注目しなくてはなるまい。こうした條件を提出できたということは、シパーヒーの勢力の強さもさることながら、彼らが比較的まとまつていたことをも示していると思われる。デリーのシパーヒーのように全インドからのよせあつめではなく、アワド駐屯軍で殆んど構成されていたため、シパーヒー内部の勢力争いもあまり生じなかつたのであらう。但し、實際には、ディーワーン、ナীবなどの地位についたものが必ずしもシパーヒーの代表といえないことは後述するとうりである。

(5) イギリスに通じた者の處分に舊宮廷人は口をさしはさめず、これを軍に任せるといふ明瞭な形をとらうとしたことは、こうしたごとくが絶えなかつたデリーの例を考えると非常に先見の明のある態度であつたといえよう。けれどもこのような強い規制を行つたにもかかわらず、デリーとは違つた形態ではあれ、後述のように、裏切り問題が発生してくることはこの地域でも同様であつた。

(6) 俸給の増額要求も條件の中にはつきりとした形で書かれた。これが支拂われたかどうかはまた別の問題である

が。

#### 四 ラクナウ政權の機構と行政會議について。

ビルジース・カードルを頭に戴いたラクナウの反亂政權はつづいて諸役職の任命を行つた。以下、諸役職の任命および行政會議に關して述べている史料を檢討してみよう。

##### (i) マムー・ハーンにたいする政府の裁判における一供述。

「反亂がおこると Mummo Khan と Jey Lall Sing は反亂したシパーヒーに運動して Birjis Kudr を王位 (throne) につけた。Mummo Khan は Huzrut Mahal の後見となり、ディーワーン・ハーナ (diwān khāna 王宮) の支配者が人々を謁見したり、裁いたりする所) の責任者となつた。これは彼に全勢力を握らせることになつた。Shuruf-ood-Dowlah はナリーブに任命され、Jey Lall は徴税官に任命されるなり……。市の名士の中で Chandee-Bara durree (Chandee Walee Baradari) の行政會議に出席する主な人物は Mummo Khan, Shuruf-ood-Dowlah と Jey Lall である。軍の將校たちもそこに集まるのが普通であつた。」

##### (ii) レイクスは一八五八年にラクナウ反亂政府の構成を次のように述べている。

「Meerza Birjis Kudr Bahadoor はデリーの皇帝の下に、アフドの Sooba (すなわち太守) であつた。彼の母は Huzrut Mahal である。この少年は現在カルカッタに幽閉中のアフドの王 (king), Wajid Ali Shah の息子である。



總理大臣 (prime Minister), Shurufoodowla, かつてモラクナウのナリーブであった。

Momoo Khan, Kaisar Bagh に住む。ディーワーン・ハーナの長官

Mujuffer Ali Khan 將軍 (General), Shurufoodowla の甥。

Rahumut Olla [Rahmat Ullah], Shurufoodowla の書記官長 (Head Munshi)

Ahmad Ali; or Chota Mia, 火薬庫管理

Maharaj Balkissan, ディーワーン

Unwur Jee, 大臣官房長官

Ali Riza Beg 市警察長官、かつてはイギリス政府の下にあつて、ダリアーバードの特別補佐官であつた。

Ahmed Olla Shah, (マフマッドウッラー)、ムハメダンの指導者。ファイザーバードから反亂した人々とともに

やつてきた人物。彼は牢獄から助け出された。根つからの叛逆者。かつてアーグラの牢獄にいた。たたかいたときは彼の手本によつて諸部隊は勇氣を振り起こす。彼は二度負傷。<sup>(31)</sup>」

(iii) 既出「アワド史」より。

「ついに行政會議がナリーブとディーワーンを任命するために開かれた。…… Sharfuddaulah はこういつた。自分分は王家の古い家臣であるから自分の任務は果し續けるが、ナリーブの勳衣は受けたくない」と。……この理由は、彼にはこの間に合せの體制の破局がよく見えていたからであり、政府〔イギリス〕が最終的に勝利すると確信していたからであつた。しかし、逃げ道はなかつた。翌日、彼が現われると、Mirza Birjis Qadar は勳衣を取りにや

つて彼に與えた。ディーワーンの勳衣を Maharaja Bal Krishna に授與するについても、彼はこの名譽を逃れようといろいろな逃げ口上を言つた。……しかし、これら將校たちは彼がディーワーンの勳衣を受けとるのを避けているのだと知ると、これを彼に強制しようとした。……彼は勳衣を着る以外どうする術もなかつた。第三の勳衣は市警察長官City Police Officerの Mirza Ali Raza Beg へ、第四の勳衣は Raund の責任者である Mir Nadir Husain へ (Raund は英語の round の訛化したベンディー語で警備の意味)、第五の勳衣は將軍の Hisam-uddaulah Bahadur へ與えられた。<sup>(32)</sup>」

(iv) ジャエ・ラールにたいする政府の裁判における一供述。

「そこで絞任が行われた。

Shruf-od-Dowla ナーイブ

Mummoo Khan ディーワーン・ハーナ

Hissam-od-Dowla 將軍Commander

Jeylal Singh 軍隊の徵稅官(33)

兵士たちはこれまで、騎兵隊は騎兵隊で獨自行動し、砲兵隊や歩兵隊も同じく獨自行動し、みなばらばらに行動してきた。しかし、今や政府とともに軍を代表し、軍の活動を指導する行政會議なくしては、政府は難局を切り抜けていくことはできない、という意見でみな一致した。各部隊はこの行政會議に代表を送り、その命令を遂行すると申出ることとした。

それ故、Birjis Kudir の即位後、八日から十日後に、彼らはこの行政會議を作りあげた。この構成は

Rajah Jeyal Singh

Mummoo Khan

Shruf-od-Dowla

Hissan-od-Dowla, 將軍〔第一五不正規騎兵連隊〕

Mukdoom Bux

Gummendee Singh

Ousan Singh

Omorow Singh

Bahadur Ally

Rughonat Singh

Missery Singh〔Misri Singh〕

Gujadhur Singh

Raj Mund Teewaree

Buckt Khan〔Bakht Khan〕

Wajid Ally Khan

Shahabadee Khan

一八五七年の反亂におけるラッテナウ政權の構造

Meer Wazeer Ally (第一二正規騎兵連隊)

Sheikh Sukhnm リナール・スーケム 騎兵隊長

Moulvee Moostan リナール・ムースタン 騎兵隊長

その他。

この行政會議は Tara Kothee で週二回から三回、討議のために集った。しかし、Moulvee Ahmed Ola Shah と Mumnoo Khan と Shuruf-od-Dowla の間に抗争がおこるとすぐ、彼らは分裂してしまつた。多数は後者の二人に加つて、Nageena Walla Bara-Duree で集まつた。Moulvee (マフマッドウッラー) の下には少数がのこり、Tara Kothee に留まつた。

Moulvee (マフマッドウッラー) の行政會議に注意を拂う者は一人もいなかった。しかし、もう一つの行政會議の討議は王妃に提出された。彼女がこれを裁可して Shuruf-od-Dowla に送る。そこで彼は諸命令を縣長チャクラダール(Chakladar) に出す一方、諸命令を各部署で實行すべく自分で Mumnoo Khan に送つたりした。各部署とはたとえば、火藥庫カウナルの Meer Kazim Ally のところ、軍隊に關するところなど、Raiah Jey Lall, 市政に關するところなる Usuf Khan (註) など……。」

(v) ジャエ・ラールにたいする政府の裁判におけるジャエ・ラールの祕書カシフの陳述文書。

「一般行政、財政業務、市廳、部隊の配置、委員會の任命などはすべて行政會議によつてなされた。行政會議が王妃か、Nawab Shuruf-od-Dowla の戸口のところまで開かれるときには、政府のメンバー全員も、連隊の指揮官た

ちも集つた。行政會議が兵舎で開かれるときには、Jeylal Singh だけが出席する習慣だつた。とある。Dara Khan や Kasim Aly などが Mumnoo Khan に代つて出席する習慣だつた。……攻撃の準備は、普通 Ragonat Sing の家で行われ、攻撃に適當な時間や時機が定められた。……

Rajah (ジャエ・ラール) 自身もこうした攻撃に参加するのが常であつた。攻城梯子や綿包みなどは攻撃の日にし  
ばく Rajah (ジャエ・ラール) が届けてきた。坑道掘りの道具もすべて Rajah (ジャエ・ラール) を通して届いた。  
坑道掘り人夫、労働者<sup>(35)</sup>をいろいろな坑道に配置するの普通 Rajah (ジャエ・ラール) によつて行われた。」

(vi) ジャエ・ラールにたいする政府の裁判における一供述。

「行政會議は Chandee Wala Bara Darree に普通は開かれ、とき々は他の場所でも開かれた。これを構成するのは將校たちで、議長は他ならぬ Rajah Jey Lall Sing であつた。……彼は軍隊の將校たちみんなと深い友好關係を持つていた。<sup>(37)</sup>」

(vii) ジャエ・ラールにたいする政府の裁判における一供述

「行政會議は二ヶ所で集る習慣であつた。軍の將校たちは、時には Dilkhosa (Dilkusha)、時には Estables (Stables) Choprawala (Thatched roof) また時には Tara Kohie に集つた。第二の行政會議は王妃の戸口 (Chandee Wala Paraduree にある) のところで開かるのが普通であつた。ベイリーの番所を攻撃するとか、カンプルでも何處でも軍を送るとかというような重要なときには、いつでも行政會議は集る習慣であつた。行政會議を構成して

たのは次の高官達であつた。

Shaikh Sukun, 騎兵隊長<sup>リナール・スーケーン</sup> Weston 騎馬隊

Wajid Aly Khan, 騎兵隊長<sup>リナール・ウジド</sup> マフド第一不正規騎兵連隊

Jehangeer Khan, 大尉<sup>リナール・ジェハンゲール</sup> 砲兵隊

Gummundee Sing, 大尉 Orr 連隊

Raj Mund Tewaree, Bole 連隊

Ruggonet Sing [Raghunath Singh] 大尉警察大隊

Omorow Sing, 警察大隊

Burkat Ahmad 騎兵隊長<sup>リナール・ブルクアト</sup> 第一二不正規騎兵連隊

Mummoo Khan

Nawab Shruf-od-Dowla

Muzuffer Aly Khan (不参加)

Meer Kazeem Aly 火薬庫長

Sungun Sing } 王妃の募集した新連隊、大尉

Surjoo Sing }

Rajah Jey Lall Sing 全行政會議議長、彼の召集によつて一切の行政會議は一定時間集つた。

Rajah Jey Lall Sing はこの行政會議と王妃との間の連絡手段の役割を果していた。<sup>(33)</sup>

(viii) 裁判におけるジャエ・ラール自身の供述。

「實力者は四者だけであつた。第一はナーイブ、第二はディーワーン・ハーナ、第三は將軍、第四は會計官レシムナであつた。自分はそのどれでもなかつた。軍隊は彼らに俸給を支拂う者にだけ従つた。その任務は、Mummoo Khan と Wajid Aly Daroga の中(87)のどちらかだ。」

以上の諸史料から次のことが分るのである。

(1) ここラクナウの行政機構はビルジース・カードルを首長に戴き、その下にまず行政會議があつた。これは、各部隊その他がばらばらに行動してゐたのでは難局をきりぬけられぬとして、團結して行動するためにつくられたものである。討議内容は一般行政、財政業務、市政、部隊の配置、政府の各役職、および委員會の任命などにわたつてゐた。その會合も週に二、三回開かれたとあり、會議は活發に機能してゐたことが分る。この下に行政會議の任命するナーイブ、ディーワーン・ハーナ、徵稅官、市警察長官、ディーワーン、將軍などがいた。これらに任命された人々の名は、それ／＼シャラフツダウラ、マムー・ハーン、ジャエ・ラール以下諸史料において殆んど一致して書かれてあるから、役職の任命はきちんと行われ、機構も他地域より整備されてゐたと考えてよからう。

(2) ラクナウには二つの勢力が存在した。一方の極には王妃やマムー・ハーンやシャラフツダウラのような舊宮廷勢力が集中してゐた。他方の極には、アフマッドウッラー (Ahmad al-Allah) が孤立してゐた。この二つの勢力は相いれることなく、(iv) が記してゐるようになり行政會議の分裂を招くに至つたのであつた。アフマッドウッラーの勢力については後述するが、少くとも初期の行政會議に關しては彼は少數派であつたことが分る。シパーヒーは初めは舊宮廷勢力と合流して多數派の行政會議を形成してゐたからである。(ii) の史料において、レイクスは、役職こそ

持たないが政府のMEMBARの中にアフマッドウツラーの名を入れている。それなのに(iv)と(vii)の史料において行政會議のMEMBARの中に彼の名が入っていないのは(iv)で述べられた行政會議の分裂後の名を記しているからなのかもしれないが、あるいは役職のないことから分るように彼は正規のMEMBARに入れなかつたのかもしれない。

(3) 舊宮廷勢力とシパーヒーを中心として作られている多数派の行政會議の中でも、機能的にはさらに二つに分れていたと考えられる。一つは軍の將校が集つたもので、ジャエ・ラールが議長であつた。この機能は(v)に充分詳しいが、主に戦闘の準備をし、その時間、時機、戦術を定めたりする相談をしたのであろう。

他方、「政府のMEMBAR全員も連隊の將校も集つた」といわれる行政會議が事實上もう一つ機能していたと考えられる。これは一つには軍と舊宮廷勢力の意見の調整機關でもあつただろうと思われる。ここでの決定は王妃の手に送られ、マムー・ハーンかシャラフツダウラの手を経て實施されたのであろう。

(4) シパーヒーの勢力がラクナウでは非常に強く、人事權の掌握がビルジース・カードル即位の前提條件であつたことは既に述べた。それにもかかわらず、ナイーブ、ディーワーン・ハリーナその他の重要ポストを舊宮廷勢力が取つたことはシパーヒーが舊宮廷勢力にたいして行つた一つの妥協であることは否定できないであらう。けれどもここでは、シパーヒーが重要ポストに名を連ねたり、有名な個人を生み出すのでなく、行政會議という組織的な合議體を通じて自分たちの勢力を保障していこうとしたことの方に注意しておきたい。

ただ、こうした努力にもかかわらず、多数派の行政會議の中では、王妃ハズラト・マハルとその情人のマムー・ハーンの權力がきわだつて大きく、合議體は充分にその機能を果していかなくなるようにみえる。また、上記の二人につづく實力者であつたと思われるシャラフツダウラが初めから逃げ腰であつたことは(iii)の史料から明らかであり、



後述するようにイギリスへ内通の噂もあつた。すなわち、多數派の行政會議は、組織的にみれば新しい行政體を生み出す可能性を持つていたが、内容からみるとその崩壊していく包芽をも實は含んでいたのである。

(5) 行政會議のメンバーの中に著名なタールクダールやザミーンダールの名がないことも注意しておかねばならないであろう。<sup>(40)</sup>これは一つには反亂にたいするタールクダールたちの態度の反映であろう。ナイーブのシャラフツダウラでさえこの新政府の破局を見通して逃げ腰であつたのだから、タールクダールたちが政權内の役職につこうとしなかつたのは當然だつたかもしれない。但し、一つ考えられることは、ベニー・マドローをジョーンプルとアーズィムガルに封じたように、タールクダールやザミーンダールを一地域でのアミールに封じて、徴税、保有地管理、行政などに専念させるやり方をラクナウ新政府が取つたかもしれないことである。その場合には一應中央政府たる行政會議には名が出なかつたかもしれない。

(7) ジャエ・ラールは軍用品の調達を一手に引受け、自ら攻撃にも参加して、戦闘の成果にも深い關心を持つていた。腐敗した舊宮廷勢力の中にあつて、このような人物の存在もあつたことを忘れてはなるまい。

## 五 アフマッドウツラーの勢力

マウラヴィー・アフマッドウツラーは一八五七年の反亂の中で様々に傳えられている人物であつて、いろ／＼と不明な點が多い人物である。彼の名も單にマウラヴィー (Maulawi、ムスリム法學者) として知られている他にアフマッドウツラー、アフマッド・アリー・シャー、シカンドラ・シャーなどと傳えられることがあり、また、ファイザバードの王 (King) などとも呼ばれた。これは彼が一八五七年の反亂の初期にファイザーバードで解放された囚人の中に入

つていて、直ちにそこで指導者選ばれたためである。

ラクナウ市にやつてきてからは、先述したように、少数派ではあつたけれども、明らかに王妃一派とは異なる権力を保持し、一つの勢力の中心点として存在していた。そして、それはラクナウの戦いが長びいていくにつれて、舊宮廷勢力を脅かしはじめていた。

最初に、蜂起のおこる以前のアフマッドウッラーについて考察してみよう。蜂起以前の彼の経歴や言動には一層不明な点が多いが、まず當時の史料がアフマッドウッラーについて語っていることは以下のとおりである。

- (i) アーグラ診療所の軍醫であつたワジール・ハーン (Wazir Khan) の供述。

「問——反亂の中で、「マウラヴィー」として廣く知られた Moulvie Ahmedoolia Shah の経歴はどのようなものであつたか。

答——彼は托鉢僧<sup>フアキール</sup>で、反亂の一、二年前にアーグラや北西州のあちこちでイギリスにたいして公然と聖戦を説いていた人物である。彼自身は、長い間住んでいたグワーリヤルの聖者、Mehrab Shah の弟子であると稱していた。アワド併合の後、彼はファイザーバードに行き、扇動行爲を續けるとともに、一方、暫く前にファイザーバードの Hunooman Chaurree [Garhi] における宗教紛争で殺された Moulvie Ameer Ali の死の復讐をするために、ムハマダンの一隊を集めはじめていた。このような治安を妨害する行爲のために、Ahmedoolia Shah はファイザーバードのイギリス當局によつて投獄されたが、そのときは激しく逮捕に抵抗し、彼は、負傷した後によつと監禁されたのであつた。アワドにおいて反亂が勃發したとき、彼は反亂した人々によつて解放され、勢力のある指導者と

なつた。……

問——あなたは、Moulvie Ahmedolla Shah と知合つてどのくらいになるか。最初に會つたのはどこか。

答——彼に最初に會つたのは反亂のまつ最中、Mohumdee においてであつた。しかし私は、彼の前身である托鉢僧トキヤクソウという名では彼のことを長い間耳にしていた。個人的に Moulvie と知るようになってから、彼がイギリスへ行つたことがあるのだということが分つた。

問——何時、どんな風にして分つたのか。

答——そのことを質問するなどということは全く心に浮ばなかつた。ただ、彼がイギリスのいろいろな場所について話すとき、明らかに精通していたことを覺えているのだ。特定の人物についての彼の話は覺えていない。彼は英語を少し話す。

問——Moulvie の年令は何歳か。

答——四〇歳くらいである。

問——彼は博學であるか。

答——特に博學というわけではない。彼はペルシア語が分り、アラビア語も少々分る。<sup>(4)</sup>

(ii) ファイザーバードの副政務官の報告(一八五七年二月十七日付)

「(一八五七年) 二月十六日の日没の頃、市の責任者である特別補佐官の Thurburn 中尉は市警察長官から次のような知らせを受けとつた。すなわち、一人の托鉢僧トキヤクソウが何人かの隨行者と一諸に市の旅籠サツカにいて、大勢の群衆が彼

を訪ねて押し寄せている。托鉢僧には、人々の中に暴動や紛争を起そうとする意志があることは明白である、と。そこで Thurburn 中尉は市警察長官と四、五人の番兵を伴つて直ちに騒動が豫想される現場へ向つた。彼は道路も旅籠の入口も内部も非常に混雑しているのを見た。托鉢僧が占據している場所に到着して、訊ねてみると、問題の男はマスキッドの中で禮拜しているところだと分つた。禮拜が済み、托鉢僧が彼に目を向けたので、Thurburn 中尉は話したいから出て来てくれと云つた。ところが彼は斷つて家の中に入つてしまつた。そこで、中尉は托鉢僧と隨行者たちが持つてゐる武器を預けるよう求めた……托鉢僧は武器を棄てることは出来ないし、決して棄てないだろう、というのはこれらの武器は彼の導師ベールから拜領したものだからだ、といつた。……(アフマッドウッラーを逮捕するとき)…… Thurburn 中尉は生命に別條はないが、やつと「ひどくの誤りか」怪我をした。シパーヒーも二人軽い怪我をした。他方、相手方は五人が重傷、三人死亡、四人が無傷で逮捕された。その指導者は一番輕傷だつた中の一人であるが、看視つきで第二インド人歩兵連隊の病院に隨行者ともども收容中である。……バザールでは彼は Sikunder Shah と呼ばれていた。彼は不完全にはあるけれども英語を話し、理解する。彼はインドのマドラスから來たと自分では云つてゐるけれども副政務官は、彼はムルターンからか、あるいは、インダス河の向う側の地方から來たのだろうという意見である。この一團の持つていた書類のあるものはきわめて疑わしい性格のものである」<sup>(42)</sup>

(iii) 一八五八年三月にファイザーバードから出された一書簡より。

「デカンのラーイーシー一族の一人であるムスリムがファイザーバードの旅籠サラフに七、八人の人物とともに滞在し

ている。彼は托鉢僧アブハキムと自稱し、イギリスにたいして聖戦を遂行することを恐れ気もなく決心している。彼はフアザーバードの街を…〔原史料判讀不能〕…する習慣であつた。…次第に、彼が反亂する考えを持ち、彼の部下たち準備させていることが明らかになつた。…（逮捕の状況の敘述は(ii)と殆んど變らないので省畧—）…（逮捕ののち）…そこで彼はムスリムとヒンドゥーの助けをかりてイギリスにたいして聖戦を遂行する準備をしていたことを明らかにした。…彼の所持品を調べると、この事件に連累していることを示すムスリムからの手紙だけは澤山發見された。しかし、ヒンドゥーからのものは皆無で、彼らが共謀しているという嫌疑は根據がなく、彼らの名は不當に言及されたのであつた。<sup>(43)</sup>」

以上の諸史料に殆んど説明の必要はないであろう。いくつかの研究論文で述べられていることも、大筋においては變りない。

彼は南インドのマドラス附近で生れ、インド各地をかなり廣く歩いており、アラビア、イランなどの外國へも行つたことがあるらしい。イギリスに渡つたとかイギリスで教育を受けたことがあるなどという説もそのまま信じるわけにはいかないにしても、イギリスに關して全く無知で偏狹だつたわけではなく、むしろ當時の段階で英語も分り、イギリスのいろ／＼なことに精通していたという點は興味深い。

反亂の前から、彼は各地のムスリムと接觸を保ち、思想的にもかなり交流を深めた結果、イギリスにたいする聖戦の遂行に積極的且戰鬥的となり、公然と聖戦を説いて、人々、とくにムスリムを組織することに成功をおさめていた。

なお、彼の思想内容や思想的背景については、別の機會にまとめて述べることにしたので、ここには觸れないでおきたい。<sup>(44)</sup>

さて、一八五七年六月八日に蜂起したファイザーバードの反亂軍は、まず二二萬ルピーをイギリスから奪い取り、次いで囚人たちを解放した。この解放された囚人の中にアフマッドウッラーが入つていて、反亂の指導者に選ばれたことは史料で既に述べたところである。

しかし、ファイザーバードにおけるアフマッドウッラーの支配は短かく、二日後には彼はしりぞけられたといわれている。人々はファイザーバードのタールクダールであつたマーン・シングに指導を求めたといわれており、アフマッドウッラーも暫くはマーン・シング (Man Sing) の指導の下にいたらしい。<sup>(45)</sup>

ファイザーバードにおけるアフマッドウッラーの支配が何故永續しなかつたのかは現在のところ、明らかでない。もと／＼アワドの中でもファイザーバードはタールクダールの勢力が強く、イギリスに反抗心を持つたタールクダールたちの中心地ともいえる所であつたので、ここが根據地でもあり、多數の手兵やタールクダールたちを味方にもつていたマーン・シングに對抗するだけの勢力を短い期間につくりあげることが難しかつたのであろう。そして、マーン・シングとアフマッドウッラーとは反亂にたいする態度が全く對照的であるから、マーン・シングが支配權を握つた以上、アフマッドウッラーは早晚ファイザーバードを立去らざるを得なかつたであらう。

ところで、アワドにおける戦いの中心もこのあとラクナウに移り、六月三〇日のチンハットの戦いから、駐在官邸籠城となつていく。チンハットの戦いには、アフマッドウッラーが指揮をとる第二インド人歩兵連隊などのファイザーバード反亂軍も合流、参加した。ここにおいてとくにアフマッドウッラーは足に負傷こそしたが目ざましい働きを見せた。<sup>(46)</sup> この結果、ラクナウにおいて指導者としての存在を次第にきわ立たせてゆくアフマッドウッラーと舊宮廷勢力とが對立し、二つの行政會議をつくるに至つたことは先述したとうりである。この對立の原因は戦いの本質その

ものに關わる問題であつたけれども、具體的契機としては警察署の設立問題などをめぐつておこつてゐる。以下の史料はこうした確執について次のように語つてゐる。

(i) 既出、ワジール・ハーンの供述。

「答——……彼はチンハットの戦いを指揮した。それからその後續いて起つたラクナウの駐在官邸包圍の指揮を暫くやつていた。彼はその勇敢さと聖者的性格のために、反亂した人々の間に非常に人氣があつた。そのため、暫くすると、王妃は彼の卓絶した勢力が彼女の権力にとつて危険ではないかとおそれはじめた。そこで王妃は Moulvie (アフマッドウツラー) の勢力を滅ぼす一隊を組織して、公然と武力攻撃の手段をとるにいたつた。彼はそこで市を離れて、郊外 (Hukeem Mendee ke Serai) にある、<sup>ホヤマヤ</sup> 四阿に居を定めた。司令官 (キャンベル) がラクナウ市を攻撃したとき、その防衛にさいしてアフマッドウツラーの果たした役割は卓越していた。占據された堡壘を最後に離れた指導者も彼であつた。イギリスの最初の勝利のあと、Moulvie (アフマッドウツラー) は Shurufood Dowlah (すなわち王妃方の大臣を捕えて、監禁し、とう／＼最後には殺してしまつた。その理由として、彼 (シャラフダウラ) がイギリス軍に助力したこと、すなわちヨーロッパ人兵士たちを駕籠に入れて堡壘の中に導き入れ、この内部からの手引があつたために外部からの攻撃が成功したからだ、と (アフマッドウツラーは) 主張してゐる。<sup>(47)</sup>」

(ii) 既出、ミール・ワジード・アリー・ダーロガの陳述。

「チンハットの戦いのあと、シパーヒーたちが市内に入つてきて、無差別に掠奪がはじまつた。Moulvie (Ahmadoolah Shah) は反亂者とともに市に入つてきて、彼の警察署を市内に設立しようとしたが、その準備は、全然成

功しなかつた。<sup>(48)</sup>」

(iii) サルファアラーズ妃<sup>ベীগム</sup>(Sarfaraaz Bigam) の手紙。

「ファイザーバードから到着するに、 Maulvi Ahmad Ullah Shah はこのような掠奪や分捕りの行爲をやめさせ、警察署 (police posts) を設立した。……それからイギリスとの戦いは始まり、全イギリス人の集つていたベイリーの番所が攻撃された。 Maulvi Ahmad Ullah Shah はその並外づれた勇猛なベイリーの番所の門までたどりついた。しかし、彼たつた一人しかいなかったたので、傷ついて、ひき返してきたのであつた。<sup>(49)</sup>」

(iv) これは一八五八年三月以後インド人スパイの集めた情報によつて書かれた史料である

「人々は軍隊の放縱な行爲に驚愕して、その場所からのがれたり、貴重品を夜の闇にまぎれて運んだりしはじめた。……そこには、人々を助けようとする意志をもつた指導者は、一人しかいないようであつた。その指導者、 Moulvi Ahmad-oola は、常に政府の首席 (head) として認められたがつていたが、軍隊にたいして放縱な行爲をやめるよう警告し、さらに彼の権限を行使するために、強欲な隨行者たちを警察官に任命した。また彼は次のような宣言をさせた。すなわち、市民は彼らを掠奪せんとする者を誰でも死刑に處する、と。彼は天文臺として知られている美しい建物を彼の住居にして、王室の様子や儀式をみな採用した。宮廷の人々は自分たちの野心満々たる計畫を脅かし、つぶしてしまいそうなこの出しやばりに怒つて、軍隊をそそのかした。彼らは、アフマッドウツラーの特に軍隊向けの宣言文にたいして、軍隊が憤慨するようしむけたのである。



その結果、Moulvie は襲われ、天文臺からもじめめに追出された。彼は後になつてムハメダンの騎兵隊の懇願でやつとのことでそこに戻れた。彼はまだヒンドゥーの諸部隊の上にも支配権を得ていなかった。(しかしその後、ハワロックがラクナウを攻撃した頃になると) 軍隊にたいする Moulvie の危険な支配権は次第に高まつてゆき、ついに宮廷人たちを危うくするまでになつてきた。宮廷人たちの方ではこの僭越きわまる狂信者の足をすくおうと必死に努力したが無駄であつた。彼はともかく、その勇氣の故に評判が高かつた。これは宮廷のその方面の人々には全く欠けているものであつた。彼は軍隊が信心深く、軽信しやすいことを利用したり、また軍隊の不埒な行爲を勵まして、軍隊の英雄となつていつた。そして今や軍隊は、イギリスのライフル銃の彈丸が彼の拊指おやびを潰してしまつた後だというのに、彼が不死身であると信じてしまつた。……(ハワロックのラクナウ到着後になると) Moulvie の勇猛さの評判は非常に高くなり、彼は神の化身 (Incarnation of the Deity) であると自慢するようになった。宮廷の人々には彼が事態の全支配権を篡奪するのを妨ぐことは、困難であることが分つた。<sup>(50)</sup>」

(v) これはラクナウで二五〇ルピーを得て情報を提供しているスパイからの手紙に依據した史料である。  
<sup>(一八五七年)</sup>

「十一月八日。……軍隊は Moulvi を彼らの司令官 (Chief) に任命した。<sup>(51)</sup>……」

以上の史料が語つてるように、舊宮廷勢力の行政會議とアフマッドウッラーを中心とした第二行政會議との對立は、警察署設立問題、いいかえれば市民掠奪問題を最初の具體的契機としている。おそらく、當時は戦勝した軍隊は市民を掠奪することが習慣となつていたのであるから、(ii)、(iii)、(iv)において記されているようなシパーヒーの市民掠奪行爲はそれほど奇異なものではなかつたのかもしれない。そして、こうしたシパーヒーの掠奪行爲を警察署の設

立によつて止めさせようとしたアフマッドウツラーの態度の方がむしろ例外であつたのかも知れない。

しかしながら、これはアフマッドウツラーにしてみれば當然のことであつた。何故なら、彼の權力の基盤の第一は、ファイザーバードでの史料(ii)が明らかに示しているように、彼の説く聖戦の訴えに賛同して集つてくる町の群衆もしくは市民であり、また各地でこのような人々を組織しているムスリム聖戦士であつたからである。ラクナウによつてきてからも、彼は市民の側に立ち、シパーヒーの掠奪行爲に反対せざるを得なかつたにちがいない。

王妃ハズラト・マハルの側では完全にこれを利用して、シパーヒーの手によつてアフマッドウツラーを天文臺の居住地から追出してしまつたのである。

しかしながら、一度はこうして多くのシパーヒーを味方につけて多數派の行政會議を成立させた舊宮廷勢力は、その後、イギリスとの戦闘の中で急速にその勢力を衰退させていつた。それはまず、(i)や(iii)に記されているように、戦闘におけるアフマッドウツラーがあまりに果敢で非妥協的であつたのに比べて、舊宮廷人たちがあまりに闘う意志を欠いていたからであろう。これはイギリス軍の攻撃が迫り、戦いが熾烈になつてくるに従つて一層はつきりしてござるを得ない。こうして舊宮廷勢力にたいする失望と反比例してアフマッドウツラーにたいするシパーヒーその他の人々の支持は飛躍的に増大していき、十二月八日、シパーヒーによつて司令官に選ばれた彼はついにラクナウにおける全事態を事實上掌握した。ここに二つの權力は全くその位置を逆轉させたのであつた。この位置の逆轉をもつとも象徴的に示しているものが(i)に記された王妃方のナイーブであるシャラフッダウラをアフマッドウツラーが殺害した事件であろう。

ただし、このようなアフマッドウツラーによる全權力の掌握は、一方でイギリスとの戦いにおいて敗北が進行する

過程と並行していたことを忘れてはならない。従つて彼は反亂軍における權勢の頂點に達するや否や、反亂ラクナウ市の陥落を見なくてはならなかつた。それゆゑ、彼のひきいる第二行政會議は組織的な整備どころではなく、彼はラクナウ陥落後、各地で展開してゆくゲリラ戰の指揮者として自らの權限の大部分を行使したのである。なおこれについては別の機會に述べることにしたい。

## 六　むすび

ラクナウ市のイギリス人籠城軍は一八五七年十一月十七日、キャンベルによつて救出されたが、ラクナウ市の反亂軍はこの後も市を支配していた。ラクナウ市がイギリス軍の手に落ちるのは翌一八五八年三月である。三月十八日、市の主要據點がイギリス軍によつて占領され、三月十九日、ハズラト・マハルとともに反亂軍の一部が市から撤退した。アフマッドウツラー指揮下の反亂軍は三月二十二日まで抵抗したが、これも市から排撃され、市は完全にイギリス軍の支配するところとなつたのであつた。

この間約九ヶ月にわたつて、デリー、カーンプル陥落後の反亂軍の希望を荷い、ラクナウ市の反亂軍支配の果した役割は大きかつた。反亂軍の權力という點からだけみてもラクナウは非常に重要な問題を提出している。

そも／＼一八五七年の反亂初期におけるシパーヒーの行動様式には大きく分けて二つの類型があつた。一つの類型は蜂起すると、全インドの反亂軍のシンボルであつたデリーのムガル皇帝のもとへと進軍していき、ムガル皇帝を戴いた權力をつくることである。もう一つはここラクナウの場合にもみられるように、シパーヒーがその地方における舊支配者、有力者、大地主などと結托してその地域で權力を樹立する場合である。後者の最も典型的な實例はシャ-

ハーバードやカーンブルにおいてみられており、それについては別の機會に述べるつもりであるのでここでは觸れないでおきたい。つまり、シパーヒーの行動、とくに當初の行動に關するかぎり、言い換えると、ビルジース・カーダルを擁立してラクナウ政權を樹立するまでは、ラクナウの政權はシャーハーバードその他と同様の地域權力樹立という性格をもつていたといえよう。ここでは、第一次蜂起のときのように、敗北した場合にしかデリー「進軍」は問題にならなかつた。

その理由としては、既に述べたとうり、ここで反亂した大多數のシパーヒーがこのアワドの出身であつたということが大きな要因となろう。さらにこれも初めに述べたがアワドは一年前の一八五六年まではともかく一つの獨立王國としてあるいは一つの州として存在してきたのであり、アワド出身で且そこに駐屯していたシパーヒーが反亂後ラクナウの舊支配者のもとに集結しやすい地理的、政治的つながりを持つていたことは見落せない事實であらう。

ただその際注意しなくてはならないことは既に述べたように、ビルジース・カーダルの即位がムガル皇帝への忠誠という枠内で行われたことである。もと／＼ムガル帝國の行政組織の中に組みこまれていたアワドの權力であつてみれば、それを擁立することはムガル皇帝の支配體制と基本的に矛盾することではなかつた。そのかぎりではカーンブルにおけるナーナー・サーヒブ軍がムガル皇帝の直接支配下に入るのをおそれてデリー進軍を中止した行動とは全く意味が異つてゐる。すなわち、ここラクナウでは、地域權力の樹立とはいうものの、ムガル皇帝擁立に強くつながる次元でのそれであつた。

ところでラクナウにおいてシパーヒーの出した條件は、そこに書かれていた行政會議の果した役割とともにやはり先驅的なものであるといふべきであらう。無論、この諸條件も内容としては他の地域と異なる目新しさは持つていな

い。俸給の倍増やイギリスに通じている者の處分などはデリーで明らかに具體的な問題として出されたものであつたし、行政會議の存在もデリーでの史料に述べられている。人事への不介入なども當然他地域のシパーヒーが要求としては持つていたものであろう。しかしこのように舊支配勢力との交渉の條件として明文化されて持出されたところがラクナウのシパーヒーの他と異つてゐる點であらう。また、行政會議にしても、その機能の活發さは他地域に類を見ないものになつてゐる。こうした實質的裏づけのある條件を舊支配勢力擁立の條件としたことはシパーヒー勢力の強さとまとまりを示していることは間違ひなからう。逆にいえばこの諸條件を容認しなければビルジース・カードルを即位させないという脅しを裏にひそめていたのであるから。

こうした諸條件の提示により、シパーヒーの意圖は一層明瞭となりそれを知ることほまたわれ／＼にとつて容易にもなつた。すなわち、イギリスに通じた者の處分權を手に入れようとしたことから分るように、シパーヒーはまずイギリスと妥協することなく敵對し、戦うことを望んでゐた。そして、その戦う反亂政權においては、軍隊自らが行政會議という形態を通じてその實權を握らんと意圖してゐた。しかしながら、既に述べたとうり彼らはここでもビルジース・カードル——ムガル皇帝というシンボルを頭に戴くことを必要としたのである。彼らの行政會議は政治の最高責任を名實ともにひきうけることは出来なかつた。彼らは諸條件の容認をビルジース・カードルの即位の前提とさせるほどの強さをもちながら、彼を傀儡化するという以上の構想は持ちえなかつた。ここに彼らの限界があり、舊支配勢力とのさまざまの妥協の人つてくる餘地が開けたのである。

舊アワド王國時代に既にナイーブであつたシャラフッダウラのナイーブ再就任はその妥協を明らかに示している。またそれは同時にシパーヒーの中にあつた舊支配勢力への期待をも祕かにあらわしてゐたものであつたかもしれない。

それゆえ、反亂の初めの頃は、少數のムスリム騎兵を除いて、大多數のシパーヒーはアフマッドウツラーの行政會議を見捨て、あまつさえ、彼を逮捕までしたのである。

しかしながら、ラクナウの反亂政權が他地域とかわだつて異質な點は、以上述べてきたような「地域權力」を脅かすもう一つの權力の誕生であつた。これこそ、アフマッドウツラーの勢力である。彼はシパーヒーたちがどうしても脱け出ることのできなかつた舊支配勢力との妥協という考えから完全に脱却していた。従つて行政會議の分裂後、アフマッドウツラーのひきいるもう一つの行政會議が反亂軍の中で力を得てくるにしたがい、ラクナウにおける反亂權力の構造と性格も急激な變化をとげざるを得ない。

何よりも彼の權力は舊宮廷人やタールクダール、ザミンダールのような大土地保有者層に全く依據していない。それどころか激しく對立せざるを得なかつた。そして、このような對立がイギリスとの戰鬪の中で深まつてゆくとき、舊支配勢力の墮落が、一度はそこに合流したシパーヒーその他の人々にも見えてこざるを得なかつたのである。それに反比例してアフマッドウツラー個人への支持と信頼度は高まつていく。そのさい、彼のムスリム聖者としての性格が當時の人々にとつて大きな魅力であつたことは重要な點であろう。また市民を掠奪することにたいする彼のきびしい態度も最後的には人々の支持を獲得する上で大きな役割を果したのである。

彼の權力が全く彼個人の資質、能力に依據していたことは大きな問題點ではあるが、ラクナウの政權は平時におけるそれとは違つて所詮反亂のため、イギリスとの戰鬪のためのものであつたのだから、機構はそれほど問題ではなく、闘う者だけが發言權を擴大していくのは當然の結果であつた。

かつて行政會議の分裂の際には、少數派で天文臺の住居からもみじめに追い出されたアフマッドウツラーが、最後

にはシパーヒーによつて司令官として選ばれ、その彼の手によつて舊宮廷人の代表ともいうべきシャラフッダウラがイギリスに内通して殺害されるに至つたことは、その陰惨さをさておけば、シパーヒーの支持と政局の實權がどのよ  
うに動いていつたかを明白に示している。ラクナウ反亂政權の九ヶ月はまさしく、たたかいの中におけるこうした流  
動の過程であつた。(終)

(1) たんぜんば、 Surendra Nath Sen; Eighteen Fifty Seven. 1957, Delhi.

(2) たんぜんば、 Talmiz khaldum; The Great Rebellion. P. C. Joshi ed.; Rebellion 1957 a symposium. July 1957, New Del-  
hi 所收。

(3) Letter from Henry Lawrence, Chief Commissioner, Oudh (Awadh), to the Governor General of India, dated 18th  
April, 1857. Freedom Struggle in Uttar Pradesh volume II Publication Bureau, Information Department, Uttar Pradesh,  
1958, p. 3. (以下この史料集を F. S. U. P. と略記し、その巻数をローマ数字で示す。)

(4) このときこのセトルメントが實際にどのやうなものであつたのか分らないのは記録が殆んど残つていないからである。アワド  
の第一次覆式セトルメントの記録はファイザーバードで一部を残すのみであつた。一八五七年の反亂の中で失われてしまつたとい  
われている。ファイザーバードにおいても、反亂の勃發とともに人々は役所に押しかけ、書類を破棄してしまつた。しかし、後  
述するタールクダールのマーン・シングの命令によつて、見つけ得たものは彼の砦に運ばれたのでファイザーバードでは一部の  
書類が残つたのである。これによつてもセトルメントが如何に人々の怨の種であつたかが分る。 District Gazetteers of the Uni-  
ted Provinces of Agra and Oudh. vol. XLIII 1905. p. 111. なお、わたぐしはこの残存する管のファイザーバードの記録をアラ  
バーキーンズの State Archives やぐくしのかの徴税所、コレクトレイトなどで見つけ出そうとしたが見つけられなかつた。

(5) B. H. Baden-Powell; Land Systems of British India. vol II., 1892. Oxford p. 201.

(6) Major-General Richard Hilton; the Indian Mutiny London, 1957. p. 122

- (7) F. S. U. P. II, p. 5. 脚注<sup>2</sup>
- (8) Extracts from a letter from Lucknow dated 21st instant. *ibid.*, p. 5.
- (9) Extracts from a letter from Lucknow, dated the 20th May, 1857 *ibid.*, p. 5.
- (10) Hutchinson; "Narrative of Events in Oudh", pp. 55~56 *ibid.* p. 9.
- (11) "The Bengal Hurkaru and India Gazette" Thursday, June 4, 1857. Extracts from a letter written to Calcutta from Lucknow, dated the 29th May, 1857, *ibid.* p. 7.
- (12) T. R. Holmes; *History of the Indian Mutiny*. London, 1913, p. 252.
- (13) Hutchinson; *op. cit.* pp. 11~12.
- (14) S. B. Chauhri; *Civil Rebellion in the Indian Mutinies 1857~1859*, Calcutta, 1957, p. 128.
- (15) Hutchinson, *op. cit.* pp. 11~12
- (16) Hilton, *op. cit.* p. 126.
- (17) Chauhri, *op. cit.* p. 129.
- (18) Hilton *op. cit.* p. 127. S. N. Sen はこの人数を以下のようにしている。一、七二〇人の戦闘員と一、二八〇人の非戦闘員の合計三千人。インド人はほぼ五〇％いて、戦闘員が七二〇人と非戦闘員が六八〇人の合計千五百人。しかし、これはいささか數字が合はずである。S. B. Sen *op. cit.* p. 196. 参照。
- (19) この反亂軍の兵力はグビンスによつてゐるが、彼はこの反亂軍の中に第七不正規歩兵連隊を入せず、また第一不正規歩兵連隊も少数しか反亂しなかつたとしてゐる。しかし、後に第七および第一のこのこりの部分も反亂した。これでアワドの不正規歩兵連隊は全部反亂したことになる。Gubbins "An Account of the Mutinies in Oudh" (London, 1858), p. p. 181~191F. S. U. P. II, pp69~70.
- (20) T. R. Holmes *op. cit.* p. 259



- (21) アンダーソン大尉なる人物は後に僅に十萬を數えていたと聞きたう。 S. B. Sen. op. cit. p. 211. しかして、これより多少多く數える説もあり、 Raikes "Notes on the Revolt in the North-Western Provinces of India" London, 1858. pp. 96~97 によれば、反亂軍はシムブーリー、タールトマールの手勢、その他を併せて約二〇萬と云ふ。 F. S. U. P. II. pp. 118~120.
- (22) イギリスのモデルにならうとしてたゞ考えられぬのは以下の史料による。これは反亂に参加した一人のシムブーリーから、ラウ政權の首長であつた後述するビルジーン・カータル宛の書状の一部である。
- 「……陛下は軍をイギリスのモデルにのこつて編成なせられた。このやり方は大變よつと私は存じております。彼らは午前十午後、占座するべきであり、命令はあつたと守られるべきであり、小暗は夜も書を部屋にこもつてなへつたりせぬ。…」 Ghulam Murtaza's letter addressed to the King, Lucknow Collectorate Mutiny Basta, F. S. U. P. II., p. 137.
- (23) 上記の "Qaisar-ut-Tawarikh" vol. II, p. 225. F. S. U. P. II. p. 87 以下に、 S. N. Sen 氏 中田と云ふ。彼は Innes; Lucknow and Oudh in the Mutiny, 以下に云ふ。
- (24) Deposition of Ali Raza Beg, ex-koival, before G. Carnegie, Deputy Commissioner, on 14. I. 1860., "Trial Proceedings; Govt. vs. Mammo Khan", Lucknow Collectorate Basta. F. S. U. P. II. p. 77.
- (25) "Trial Proceedings; Govt. vs. Raja Jai Lal Singh. Govt. Decision", Lucknow Collectorate Mutiny Basta F. S. U. P. II. p. 79.
- (26) このミールはムガル帝國のされどなへ、マムムムがむむミール (國務大臣) である。
- (27) Statement of Mir Wajid Ali Darogah Taken on the th 8 of July, 1859. "Trial Proceedings; Govt. vs. Rajah Jai Lal Singh, Lucknow Collectorate Mutiny Basta. F. S. U. P. II. pp. 79~85.
- (28) kamal-ud-Din Haider Husaini "Tarikh-i-Awadh or Qaisar-ut Tamarikh" vol. II. p. 225. F. S. U. P. II. p. 88.
- (29) シャキ・ノール自身の供述は以下の如く述べらる。 "Mummo Khan 大尉と Rugonath Sing 大尉と Omorao Sing, Burkat Ahmed, Abool Kazim 等の他を自分の目論みだつてはかりこんだ。そうしなかつたが、最後の二人は、王位のために百萬ルピー

も支拂つた Sooliman Kutr を即位させたであらう。「マター・ハン」たちはおそろひこれ以上の金額でシン・ローイーを買収し、ク  
 ライン・カーダルをおしのけて、エリス・カーダルを即位させたのであらう。Extract from Raja Jai Lal's version of  
 the Revolutionary Govt. recorded on the 30th August, 1859 as his defence. "Trial Proceedings; Govt. vs. Raja Jai Lal  
 Singh". Lucknow Collectorate Mutiny Basta. F. S. U. P. II. p. 114.

(36) しかし、ラクナウからは澤山の贈物を持つて特使がデリーに出かけて行き、デリーはそれを受取つてゐる。このような關係  
 をみるに、實質的には大守<sup>ナヤブ</sup>——皇帝の關係を考へてみようであらう。T. H. Kavanagh "How I won the Victoria Cross" Lon-  
 don, 1860, pp. 124~134. F. S. U. P. II. p. 142.

(37) Deposition of Mir Yusuf, father and Darogha of the Shahenshah Mahal, taken on oath before G Carnegie, Deputy  
 Commissioner on 12th January, 1860. "Trial Proceedings; Govt. vs. Mammu Khan". Lucknow Collectorate Mutiny Basta.  
 F. S. U. P. II. p. 79.

(38) Raikes "Notes on the Revolt in the North-Western Provinces of India" (London 1858), pp. 96~97. F. S. U. P. II. p. 118

(39) Kamal-ud-Din Haidar Husaini. op. cit. pp. 228~229. F. S. U. P. II. p. 106.

(34) 原註——この任命は大守<sup>ナヤブ</sup>時代に行われた。彼は反亂した人々から地税をとりたてて行く軍を指揮する任務に従事した。F.  
 S. U. P. II. p. 113.

(35) Statement of Syed Eusuf (Saiyid Yusuf) then living in Ismail Gunje (Ismailganj), Darogah (Darogha) of Shahenshah  
 Mahal, "Trial Proceedings; Govt. vs. Raja Jai Lal Singh". Lucknow Collectorate Mutiny Basta, F. S. U. P. II. pp. 113~114.

(36) 坑道を掘つてそこに爆薬を仕掛け、同時に攻城梯子を使つて一勢攻撃をするのが、ラクナウ反亂軍の行つたも  
 つとも有效な戦術であつた。こうした大きい攻撃は七月二〇日、八月十日、八月十八日、九月五日が記録されている。Hilton,  
 op. cit. p. 32.

(37) Written Statement of Matra Deen (Mata Din), Moonshi of Rajah Jey (Jai) Lal Singh, taken on the 5th July



リーにいた間にサドルッディーン (Sadr al-Din) やフズル・ハック (Fazl Haqq) のような人々と交渉を持った。彼はワッハビーではなかつたが、彼らと密に緊密な協力關係であつた。K. M. Ashraf: Muslim Revivalists and Revolt, P. C. Joshi ed. *Rebellion 1857 a symposium*, op. cit. 所收 p. p. 86~98. 参照。

また、M. I. D. シャハービー (M. I. U. Shahabi) はこれらと大筋において同様に次のごとく述べている。アフマッドウッラーはイスラム歴二〇四年にチナバタン (マドラス) に生れた。彼はゴルコンダの最後の支配者アブール・ハサン・ターナー・シャー (Abu-al-Hasan Tana Shah) の孫を祖先とする大守の家柄に生まれて當時最高の教育を受けた。宗教關係の諸學を學んだ上に武術も高度の訓練を受けた。ティプー・スルターンの壮烈な話によつて自由への道に献身するべきだとの考えを抱くようになった。アラビヤとイランを廣く旅行した後歸國、ミール・クルバン・マリー (Mir Qurban, Ali) に會つた。シャイブールへ行つた。彼はミールの弟子となり、ヌーフイーを組織、改革すべき特別な指令を與えられた。後、トンクへ出發したが、ここでサマー (Sama 托鉢僧などが聖歌をきいて一種の入神の境地に入ること) の集會を持つたといふので正統派に批判された。ここからゾワリヤルへ行き、ミフラーブ・シャーに會つた。彼はアフマッドウッラーを彼のカリフとして、そらに、イギリス政府にたいして聖戰を遂行するようすすめた。次いで、アフマッドウッラーはデリーのサドルッディーンの紹介でアングラのムフター・イ・イナームッラー・ハーン (Mufit 'Inam al-Allah Khan) のもとへ行き、ここに數年留まつた。彼はここでウラマーたちのマジュリス (majlis, 集會) に積極的に參加したが、このウラマーたちは、秘密に、着實に外國支配に對する抵抗運動に人々を準備してゐた。Mufit Iritizam Ullah Shahabi: "Mawana Ahmad-Allah Shah", Journal of the Pakistan Historical Society, vol. II, Part. I, Karachi Jan. 1954. 所收 p. p. 52~59

(46) S. B. Chauhri, op. cit. p. 130

(47) Kamal-ud-Din Haider "Tarikh-i-Awadh or Qaisar-ut-Tawarikh" op. cit. vol. II. p. p. 212~218. F. S. U. P. II. p. 54., Telegram from H. Tucker to Canning, Calcutta, dated Baranas, Saturday, 14th July, 1857 (6~159. m) F. S. U. P. II. p. 59.

- (87) 'Deposition of Wazir Khan, late Sub. Assit. Surgeon of Agra Dispensary', op cit., F. S. U. P. II, pp. 147~148.
- (88) Statement of Mir Wajid Ali Darogha. op. cit. F. S. U. P. II, p. 81.
- (89) Extract from Sarfaraz Begam's letter to Jan-i Jan Begam, "Begamat-i-Awadh Ke Khutur", pp. 42 to 45, F. S. U. P. II, pp. 102~104.
- (90) T. H. Kavanagh : "How I won the Victoria Cross", op. cit. F. S. U. P. II, p. p. 138~144.
- (91) Foreign Secret Consultations, 26th February 1858, NOS. 226~228; op. cit. F. S. U. F. II, p. 258.